

生涯学習支援者養成課程における初年次教育科目の課題

—「生涯学習セミナー」の経年分析—

猿田真嗣, 白木賢信

Tasks of Subject for First-Year Students in Lifelong Learning Supporters Training Curriculum : Interannual Analysis “Lifelong Learning Seminar”

Shinji SARUTA, Takanobu SHIRAKI

2015年11月20日受理

抄 録

本論文では、「生涯学習セミナー」における経年分析を行った。分析の結果、1) および 2) が明らかとなった。1) 受講成果については、生涯学習および生涯スポーツにかかわる基礎的な知識を理解することの成果が徐々に上がってきており、男性および生涯学習専攻にとっては友人関係等の構築の場として機能しつつあるが、本学科教員や上級学生への親しみを得的機会としての成果がそれほど上がっていない。2) 活動への評価については、上級学生が参画する活動や生涯スポーツ分野の実践にかかわる講義は年々評価が上がってきている一方、生涯学習分野の実践にかかわる講義については評価が下降気味で、生涯スポーツ分野との相対的な違いが見られる。

キーワード：初年次教育，生涯学習支援者養成，四分位法，生涯学習，生涯スポーツ

1. 目的

本論文は、生涯学習支援者養成を主目的とする課程・学科（以下、生涯学習支援者養成課程）における初年次教育科目の在り方を解明する研究作業の一環として、常葉大学教育学部生涯学習学科（以下、本学科）における1年次対象の卒業必修科目「生涯学習セミナー」（以下、セミナー）における経年分析の結果を提示しようとするものである。

本研究作業にかかわる最近の動向を若干述べておくと、例えば、2015年6月8日の文部科学大臣通知で「[「ミッションの再定義」で明らかにされた各大学の強み・特色・社会的役割を踏まえた速やかな組織改革に努めることとする]¹⁾とした上で、「特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう

努めることとする」²⁾としており、前述の教員養成系学部の見直しにかかわるところでは教員免許取得を要しないいわゆるゼロ免課程の廃止などの動きが急ピッチで進んでいる³⁾。これはあくまでも国立大学の動きであり私立大学も同調して進むとは限らないが、生涯学習支援者養成課程の多くが前述の教員養成系学部のゼロ免課程の1つとして育ってきた歴史的経緯があることから、我が国の生涯学習支援者養成課程としての本学科の責任は今後ますます大きくなるに違いない。このような本学科が抱える昨今の状況も加え、今後、初年次教育科目のさらなる改善が求められているが、そのための研究蓄積が依然不足しており、現状では担当教員のこれまでの経験に頼る改善が殆どである。

そのような課題解決に向けた第1歩として、開設初年度（平成24年度）のセミナーについて、授業内容の実施報告とともに、その成果と課題についての検討結果が提示されている⁴⁾。本研究作業はその継続作業として位置づけられるものでもあるが、具体的には3年度分の調査データの分析を中心とし、その分析結果からセミナーの課題を示し、あわせて今後の展望も提示しようとするものである。

なお、本論文における執筆分担は、1.～4.が白木、5.が猿田である。

2. 研究方法

(1) 分析方法

前述の目的を受けて、今回は、各年度における受講成果、活動への評価それぞれについての上位群および下位群の項目を明らかにし、年度変化の傾向を捉えることにした。年度変化の傾向を捉えるにあたり、年度を説明変数とした回帰分析等さまざまな分析手法が想定されるが、3年度分という僅かなデータ蓄積である現状にあっては、まずは粗視的に傾向を捉える方が有効であると考えられる。そこで今回は四分位法によって上位群及び下位群を析出し、両群の特徴分析を行うこととした⁵⁾。

(2) データ収集の方法

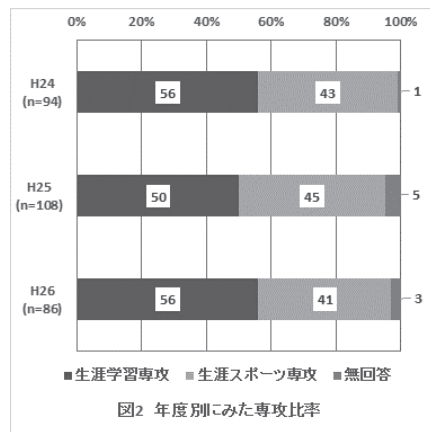
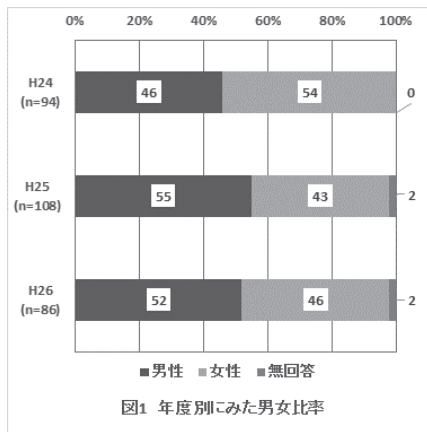
上述の分析にあたり、セミナーの成果と課題を明らかにすることを目的とした調査のデータを使用した。この調査の主な内容は、セミナーから得られた成果（以下、受講成果）、セミナーにおける各活動についての評価（以下、活動への評価）、及び属性（性別、所属専攻）である⁶⁾。概要は表1の通りで、継続的に3回実施した調査データを用いることにした。

表1 調査概要

	H 24 調査	H 25 調査	H 26 調査
対象	平成 24 年度履修者 98 名	平成 25 年度履修者 119 名	平成 26 年度履修者 91 名
日時	平成 25 年 1 月 31 日・第 15 回授業終了時	平成 26 年 1 月 29 日・第 15 回授業終了時	平成 27 年 1 月 28 日・第 15 回授業終了時
方法	質問紙（アンケート）による配布回収法	同左	同左
サンプルの回収数（率）	94% (96%)	108(91%)	86(95%)
サンプルの有効回収数（率）	同上	同上	同上

図1および図2は、サンプル（被調査者）のプロフィールとして、年度別にみた男女比率・専攻比率の推移を捉えたものである。図1によると、H24調査（以下、H24）は男性より女性の方が上回っているが、H25調査（以下、H25）およびH26調査（以下、H26）では男性の方が上回っている。図2については、両専攻の募集定員（生涯学習専攻50名・生涯スポーツ専攻30名）の違ってもあって、各年度とも生涯学習専攻の比率の方が高いが、H25は両専攻の比率差は5%となっている。

このような年度の推移に若干の違いがあることも含めて、次章以降で提示する集計および分析結果を読んでいく必要がある。



3. 結果

(1) 基礎集計結果

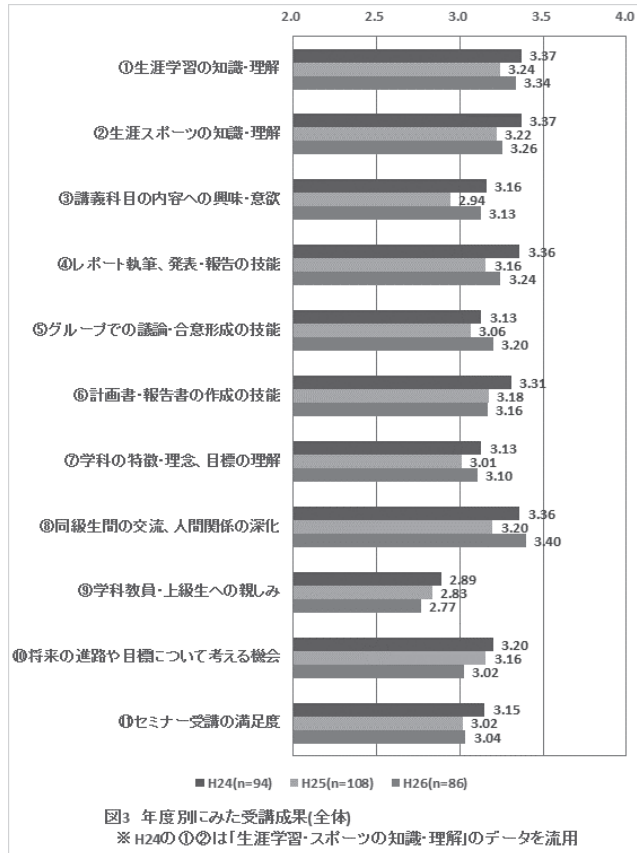
2. (1)の分析方法で述べたように、本論文では、受講成果、活動への評価それぞれについて、上位群・下位群の年度変化の傾向を捉え、両群の特徴分析を行うことから、その分析結果の提示が中心となるが、その前提となる基礎集計結果をここで提示しておきたい。

1) 受講成果

受講成果については、図3を用いて説明することにしよう。今回の受講成果は、図中の①～⑪の11項目について、それぞれ「そう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4段階で捉えている⁷⁾。集計にあっては「そう思う」を4点、「少しそう思う」を3点、「あまりそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点と得点化した上で、各項目の平均値を年度別に算出した。

図3はサンプル全体の集計結果であるが、各年度における最も得点の高い項目を挙げてみると、H24では「①生涯学習の知識・理解」と「②生涯スポーツの知識・理解」（ともに3.37）、H25では「①生涯学習の知識・理解」（3.24）、H26では「⑧同級生間

の交流、人間関係の深化」(3.40)となっている。一方、最も得点の低い項目はどの年度にあっても「⑨学科教員・上級生への親しみ」となっており、その得点は年度を追うにつれて低下傾向にある(H24:2.89、H25:2.83、H26:2.77)。

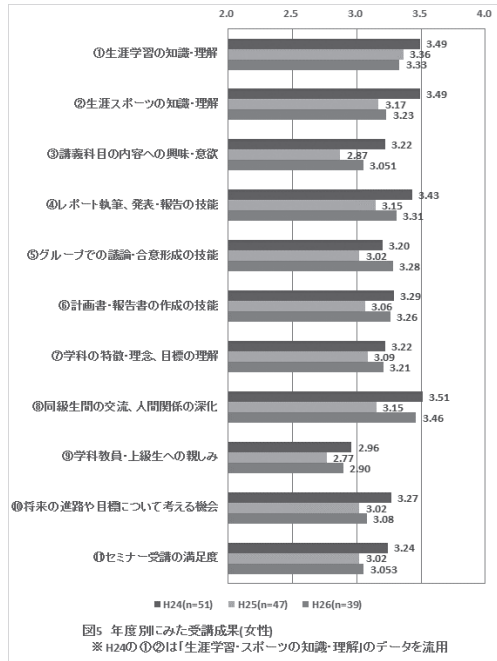
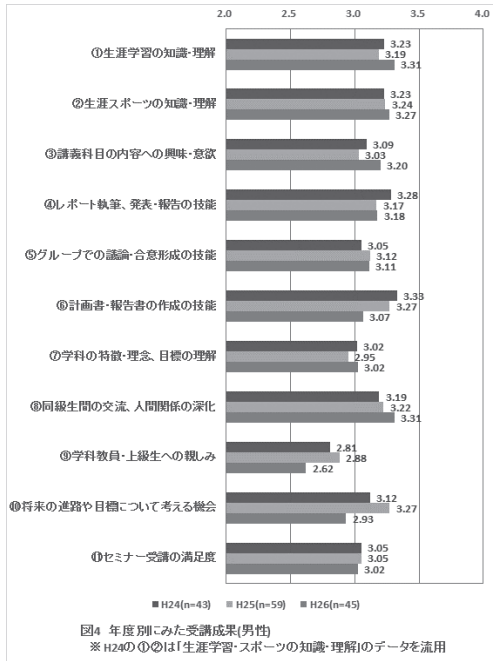


この受講成果を性別に集計した結果が図4(男性)と図5(女性)である。

男性にあって各年度で最も得点の高い項目を挙げると、H24は「⑥計画書・報告書の作成の技能」(3.33)、H25は「⑥計画書・報告書の作成の技能」と「⑩将来の進路や目標について考える機会」(ともに3.27)、H26は「①生涯学習の知識・理解」と「⑩将来の進路や目標について考える機会」(ともに3.31)である。一方、最も得点の低い項目は、どの年度も「⑨学科教員・上級生への親しみ」である(H24:2.81、H25:2.88、H26:2.62)。

女性の場合は、H24とH26では「⑧同級生間の交流、人間関係の深化」(H24:3.51、H26:3.46)、H25では「①生涯学習の知識・理解」(3.36)が各年度にあって最も比率が高い。最も得点の低い項目は、男性と同様、どの年度も「⑨学科教員・上級生への親しみ」である(H24:2.96、H25:2.77、H26:2.90)。

生涯学習支援者養成課程における初年次教育科目の課題

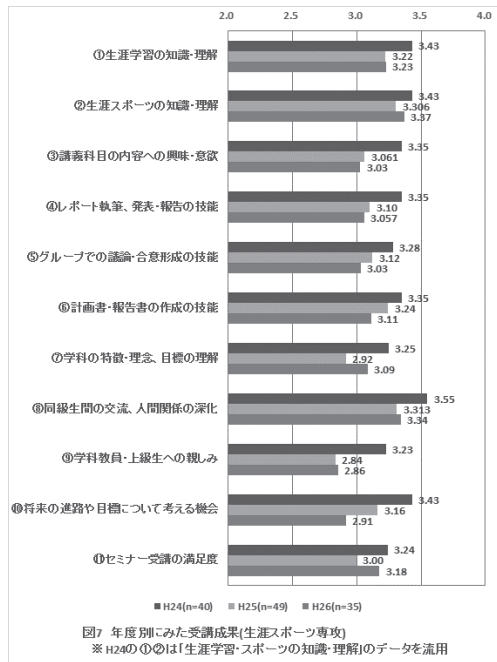
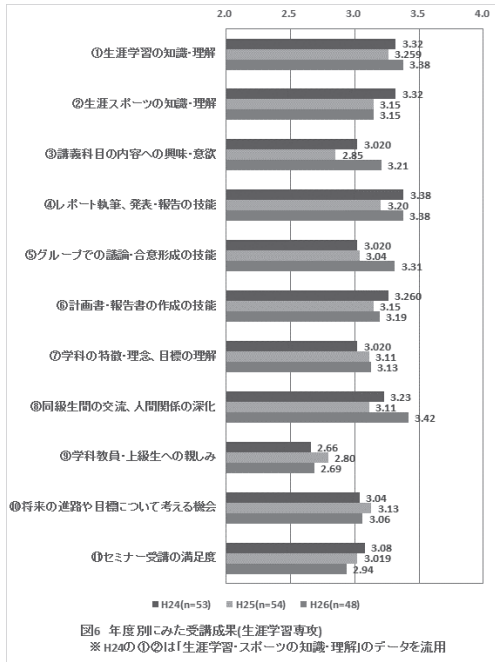


専攻別に行った集計結果は、図6（生涯学習専攻）と図7（生涯スポーツ専攻）である。

生涯学習専攻では、H24で「④レポート執筆、発表・報告の技能」(3.38)、H25で「①生涯学習の知識・理解」(3.259)、H26で「⑧同級生間の交流、人間関係の深化」(3.42)が各年度の最も比率の高い項目である。また、「⑨学科教員・上級生への親しみ」が各年度で最も得点の低い項目である（H24：2.66、H25：2.80、H26：2.69）。

生涯スポーツ専攻については、H24とH25では「⑧同級生間の交流、人間関係の深化」(H24：3.55、H25：3.313)、H26では「②生涯スポーツの知識・理解」が各年度にあって最も比率の高い項目となっている。一方、最も得点の低い項目は、生涯学習専攻と同様どの年度も「⑨学科教員・上級生への親しみ」で、H24が3.23、H25が2.84、H26が2.86である。

生涯学習支援者養成課程における初年次教育科目の課題

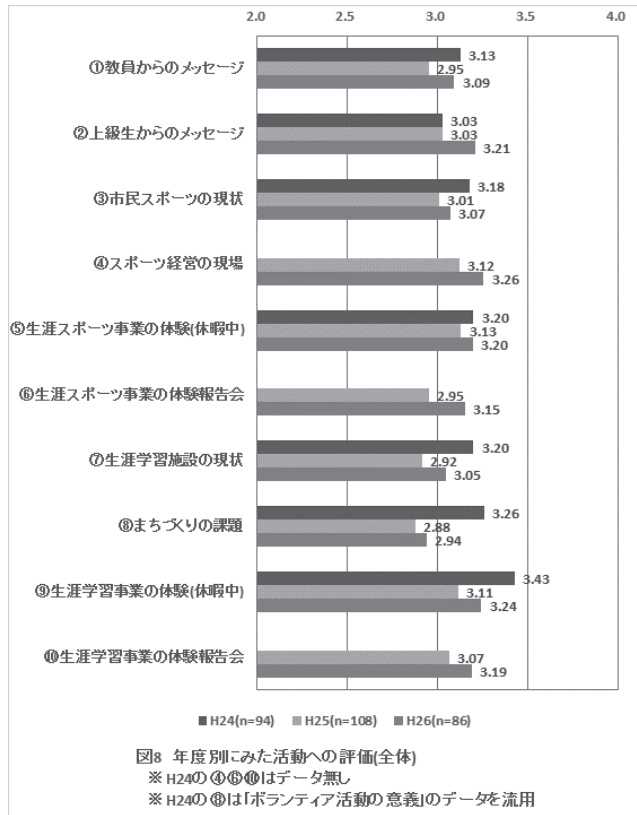


2) 活動への評価

活動への評価については、今回は図8で示す①～⑩の10項目を取り上げ、それぞれ「とても良かった」「良かった」「少し良かった」「良くなかった」の4段階で捉えている⁸⁾。集計では「とても良かった」を4点、「良かった」を3点、「少し良かった」を2点、「良くなかった」を1点と得点化の上、各項目の平均値を年度別に算出した。

サンプル全体の集計結果は図8の通りであるが、各年度における最も得点の高い項目を挙げると、H24では「⑨生涯学習事業の体験(休暇中)」(3.43)、H25では「⑤生涯スポーツ事業の体験(休暇中)」(3.13)、H26では「④スポーツ経営の現場」(3.26)となっている。一方、最も得点の低い項目は、H24は「②上級生からのメッセージ」(3.03)、H25とH26はともに「⑧まちづくりの課題」(H25:2.88、H26:2.94)である。

生涯学習支援者養成課程における初年次教育科目の課題

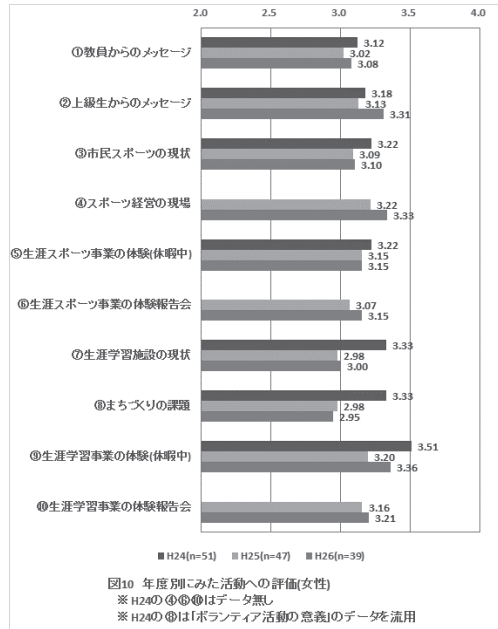
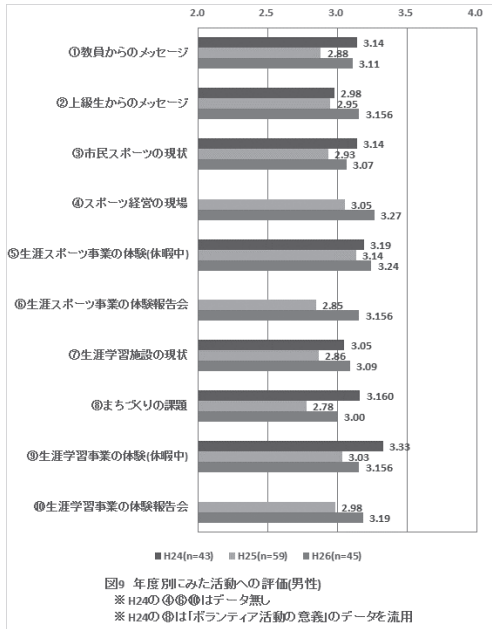


この活動への評価についても、性別の集計を行ったところ、図9（男性）と図10（女性）の結果が得られた。

男性で各年度において最も得点の高い項目は、H24では「⑨生涯学習事業の体験(休暇中)」(3.33)、H25では「⑤生涯スポーツ事業の体験(休暇中)」(3.14)、H26では「④スポーツ経営の現場」(3.27)である。一方、最も得点の低い項目は、H24は「②上級生からのメッセージ」(2.98)、H25とH26はともに「⑧まちづくりの課題」(H25: 2.78、H26: 3.00)となっている。

女性の各年度で最も高い得点の項目についてみると、H24とH26は「⑨生涯学習事業の体験(休暇中)」(H24:3.51、H26:3.36)、H25は「④スポーツ経営の現場」(3.22)となっている。また、最も得点の低い項目は、H24では「①教員からのメッセージ」(3.12)、H25では「⑦生涯学習施設の現状」と「⑧まちづくりの課題」(ともに2.98)、H26では「⑧まちづくりの課題」(2.95)である。

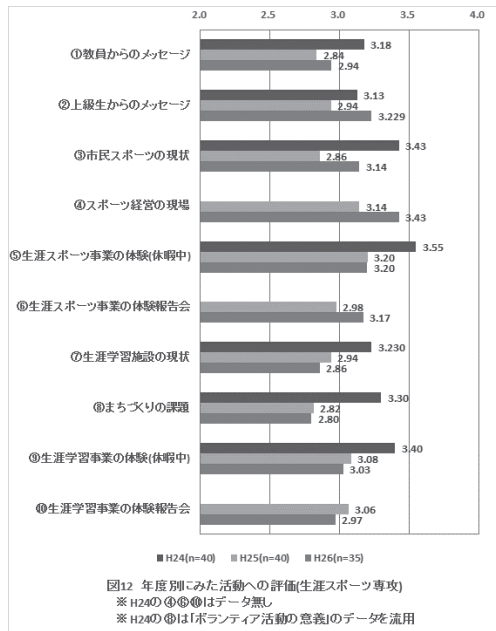
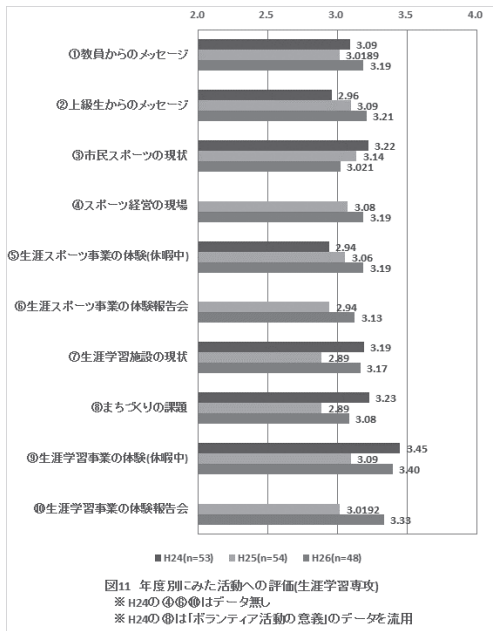
生涯学習支援者養成課程における初年次教育科目の課題



専攻別の集計結果は、図 11（生涯学習専攻）と図 12（生涯スポーツ専攻）である。

生涯学習専攻では、各年度において最も得点の高い項目が、H24 と H26 で「⑨生涯学習事業の体験（休暇中）」（H24：3.45、H26：3.40）、H25 で「③市民スポーツの現状」（3.14）となっている。得点の最も低い項目は、H24 では「⑤生涯スポーツ事業の体験（休暇中）」（2.94）、H25 では「⑦生涯学習施設の現状」と「⑧まちづくりの課題」（ともに 2.89）、H26 では「③市民スポーツの現状」（3.021）である。

生涯スポーツ専攻をみると、各年度で最も得点の高い項目は、H24 と H25 では「⑤生涯スポーツ事業の体験（休暇中）」（H24：3.55、H25：3.20）、H26 では「②上級生からのメッセージ」（3.229）である。一方、最も得点の低い項目は、H24 で「②上級生からのメッセージ」（3.13）、H25 と H26 で「⑧まちづくりの課題」（H25：2.82、H26：2.80）となっている。



(2) 四分位法による分析結果

(1)で提示した結果を受け、ここでは、受講成果、活動への評価それぞれについて、上位群・下位群の年度変化の傾向を捉え、両群の特徴分析の結果を提示することにしよう。上位群・下位群の捉え方はさまざまであるが、今回は2.(1)で述べたように四分位法でそれらを捉えることにした。

1) 受講成果

受講成果について、サンプル全体の分析結果は表2である。分析では、各年度における①～⑩の項目3年度分(合計33項目)の得点を一括で高低の順に並べ、それらを四分位点による分割を行った。第3四分位点より得点の高い項目群(概ね上位1/4に相当)を上位群、第1四分位点より得点の低い項目群(概ね下位1/4に相当)を下位群とし、両群の間に存する項目群を中位群としている。

表2によると、上位群で推移する項目は無いが、逆に「⑨学科教員・上級生への親しみ」のような下位群のまま毎年度推移している項目が見られる。また、年度を経るにつれて上位群への推移傾向が見られる項目は無いが、下位群への推移傾向のある項目としては、「⑩セミナー受講の満足度」(中位群→下位群→下位群)と「⑩将来の進路や目標について考える機会」(中位群→中位群→下位群)が挙げられる。

表 2 四分位法による受講成果(全体)の分析結果

	H 24	H 25	H 26
上位群(上位 1/4)	①②④⑥⑧		①②⑧
中位群	③⑤⑦⑩⑪	①②④⑤⑥⑧⑩	③④⑤⑥⑦
下位群(下位 1/4)	⑨	③⑦⑨⑪	⑨⑩⑪

※表中の丸数字は、図 3 の各項目の丸数字に対応

これを性別で行った分析結果が表 3 (男性) と表 4 (女性) である。

男性では、上位群のまま推移している項目は無いが、下位群のまま推移している項目は「⑦学科の特徴・理念、目標の理解」と「⑨学科教員・上級生への親しみ」である。また、年度を経るにつれて上位群への推移傾向のある項目としては、「②生涯スポーツの知識・理解」(中位群→上位群→上位群)、「①生涯学習の知識・理解」と「⑧同級生間の交流、人間関係の深化」(ともに中位群→中位群→上位群)が挙げられる。一方、「⑪セミナー受講の満足度」は下位群への推移傾向にある(中位群→中位群→下位群)。

表 3 四分位法による受講成果(男性)の分析結果

	H 24	H 25	H 26
上位群(上位 1/4)	④⑥	②⑥⑩	①②⑧
中位群	①②③⑤⑧⑩⑪	①③④⑤⑧⑪	③④⑤⑥
下位群(下位 1/4)	⑦⑨	⑦⑨	⑦⑨⑩⑪

※表中の丸数字は、図 4 の各項目の丸数字に対応

女性については、「①生涯学習の知識・理解」は上位群のまま推移しているが、逆に「⑨学科教員・上級生への親しみ」は男性と同様、下位群のまま推移する項目である。また、上位群への推移傾向のある項目は無いが、下位群への推移傾向のある項目としては、「③講義科目の内容への興味・意欲」(中位群→下位群→下位群)が挙げられる。

表4 四分位法による受講成果(女性)の分析結果

	H 24	H 25	H 26
上位群(上位 1/4)	①②④⑧	①	①④⑧
中位群	③⑤⑥⑦⑩⑪	②④⑥⑦⑧	②⑤⑥⑦⑩⑪
下位群(下位 1/4)	⑨	③⑤⑨⑩⑪	③⑨

※表中の丸数字は、図5の各項目の丸数字に対応

専攻別の分析結果は、表5(生涯学習専攻)と表6(生涯スポーツ専攻)である。

生涯学習専攻にあっては、上位群のまま推移している項目は無い。下位群のまま推移している「⑨学科教員・上級生への親しみ」は、前述の男性・女性と変わらない。また、「⑤グループでの議論・合意形成の技能」と「⑧同級生間の交流、人間関係の深化」は、ともに上位群への推移傾向のある項目であるが(中位群→中位群→上位群)、「⑪セミナー受講の満足度」は下位群への推移傾向が見られる(中位群→下位群→下位群)。

表5 四分位法による受講成果(生涯学習専攻)の分析結果

	H 24	H 25	H 26
上位群(上位 1/4)	①②④⑥		①④⑤⑧
中位群	③⑤⑦⑧⑩⑪	①②④⑤⑥⑦⑧⑩	②③⑤⑥⑦⑩
下位群(下位 1/4)	⑨	③⑨⑪	⑨⑪

※表中の丸数字は、図6の各項目の丸数字に対応

生涯スポーツ専攻の場合は、上位群のまま推移している項目も、下位群への推移している項目も見られない。また、上位群への推移傾向のある項目も無いが、「⑨学科教員・上級生への親しみ」(中位群→下位群→下位群)や「⑤グループでの議論・合意形成の技能」(中位群→中位群→下位群)、さらには「③講義科目の内容への興味・意欲」「④レポート執筆、発表・報告の技能」「⑩将来の進路や目標について考える機会」(ともに上位群→中位群→下位群)はいずれも下位群への推移傾向のある項目である。

表6 四分位法による受講成果(生涯スポーツ専攻)の分析結果

	H 24	H 25	H 26
上位群(上位 1/4)	①②③④⑥⑧⑩		②
中位群	⑤⑦⑨⑪	①②③④⑤⑥⑧⑩	①⑥⑦⑧⑪
下位群(下位 1/4)		⑦⑨⑪	③④⑤⑨⑩

※表中の丸数字は、図7の各項目の丸数字に対応

2) 活動への評価

活動の評価に関するサンプル全体の分析結果は表7である。この分析にあっても、1)と同様、各年度における①～⑩の項目3年度分(H24の④⑥⑩のデータは無いので合計27項目)の得点を一括で高低の順に並べた上で、上位群・中位群・下位群の3群に分割している。

この表によると、上位群のまま3ヶ年度推移している項目も、下位群のまま3ヶ年度推移している項目も見当たらない。上位群への推移傾向のある項目を挙げると、「②上級生からのメッセージ」がある(中位群→中位群→上位群)。またH24のデータが無いため参考扱いとなるが、「④スポーツ経営の現場」も挙げることができる(中位群→上位群)。下位群への推移傾向のある項目としては、「⑧まちづくりの課題」がある(上位群→下位群→下位群)。

表7 四分位法に依る活動への評価(全体)の分析結果

	H 24	H 25	H 26
上位群(上位 1/4)	⑧⑨		②④⑨
中位群	①②③⑤⑦	②④⑤⑨⑩	①③⑤⑥⑦⑩
下位群(下位 1/4)		①③⑥⑦⑧	⑧

※表中の丸数字は、図8の各項目の丸数字に対応

性別による分析結果は、表8(男性)と表9(女性)である。

男性では、サンプル全体と同様、上位群のまま推移している項目も、下位群のまま推移している項目も無い。また、上位群への推移傾向の見られる項目については、H24のデータが無いことからともに参考扱いであるが、「④スポーツ経営の現場」と「⑩生涯学習事業の体験報告会」が挙げられる(ともに中位群→上位群)。なお、下位群への推移傾向のある項目が見られない。

表 8 四分位法による活動への評価(男性)の分析結果

	H 24	H 25	H 26
上位群(上位 1/4)	⑤⑧⑨		④⑤⑩
中位群	①②③⑦	④⑤⑨⑩	①②③⑥⑦⑧⑨
下位群(下位 1/4)		①②③⑥⑦⑧	

※表中の丸数字は、図 9 の各項目の丸数字に対応

女性の場合も、男性と同じく、上位群のまま推移している項目も、下位群のまま推移している項目も見られない。また、「②上級生からのメッセージ」は、サンプル全体と同様、上位群への推移傾向にあり(中位群→中位群→上位群)、さらに「④スポーツ経営の現場」(中位群→上位群)もそれに準ずる項目であるが、H24 のデータが無く参考扱いである。一方、「⑦生涯学習施設の現状」と「⑧まちづくりの課題」は、下位群への推移傾向の見られる項目である(ともに上位群→下位群→下位群)。

表 9 四分位法による活動への評価(女性)の分析結果

	H 24	H 25	H 26
上位群(上位 1/4)	⑦⑧⑨		②④⑨
中位群	①②③⑤	②③④⑤⑨⑩	①③⑤⑥⑩
下位群(下位 1/4)		①⑥⑦⑧	⑦⑧

※表中の丸数字は、図 10 の各項目の丸数字に対応

専攻別に行った分析結果は、表 10 (生涯学習専攻) と表 11 (生涯スポーツ専攻) である。

生涯学習専攻にあっては、上位群のまま推移している項目も、下位群のまま推移している項目も無い。しかし、上位群への推移傾向のある項目には「②上級生からのメッセージ」が挙げられ(下位群→中位群→上位群)、また H24 のデータが無いが「④スポーツ経営の現場」(中位群→上位群)もそれに準ずる項目である。なお、下位群への推移傾向の見られる項目は見当たらない。

表 10 四分位法による活動への評価(生涯学習専攻)の分析結果

	H 24	H 25	H 26
上位群(上位 1/4)	③⑧⑨		②⑨⑩
中位群	⑦	①②③④⑤⑨⑩	①③④⑤⑥⑦⑧
下位群(下位 1/4)	①②⑤	⑥⑦⑧	

※表中の丸数字は、図 11 の各項目の丸数字に対応

生涯スポーツ専攻については、生涯学習専攻と同じく、上位群のまま推移している項目も、下位群のまま推移している項目も見られない。さらに上位群への推移傾向のある項目も、H24 のデータの無い「④スポーツ経営の現場」(中位群→上位群)のみである。逆に下位群への推移傾向のある項目としては、それぞれ推移のパターンが異なるが、「⑦生涯学習施設の現状」(上位群→中位群→下位群)と「⑧まちづくりの課題」(上位群→下位群→下位群)が挙げられる。

表 11 四分位法による活動への評価(生涯スポーツ専攻)の分析結果

	H 24	H 25	H 26
上位群(上位 1/4)	③⑤⑦⑧⑨		④
中位群	①②	②④⑤⑥⑦⑨⑩	①②③⑤⑥⑨⑩
下位群(下位 1/4)		①③⑧	⑦⑧

※表中の丸数字は、図 12 の各項目の丸数字に対応

4. 考察

3. で述べた分析結果によると、受講成果、活動への評価それぞれにおける項目のうち、毎年度安定的に高いタイプ(以下、タイプ A)、年度変化が上昇傾向にあるタイプ(以下、タイプ B)、年度変化が下降傾向にあるタイプ(以下、タイプ C)、毎年度安定的に低いタイプ(以下、タイプ D)の 4 タイプを析出することができる。

(1) 受講成果について

受講成果について、タイプ A の項目としては、男性の「②生涯スポーツの知識・理解」と女性の「①生涯学習の知識・理解」が挙げられ、またタイプ B には、男性

の「①生涯学習の知識・理解」「⑧同級生間の交流、人間関係の深化」、生涯学習専攻の「⑤グループでの議論・合意形成の技能」「⑧同級生間の交流、人間関係の深化」が析出される。

一方、タイプCとしては、サンプル全体および生涯スポーツ専攻の「⑩将来の進路や目標について考える機会」、男性の「⑪セミナー受講の満足度」、生涯スポーツ専攻の「③講義科目の内容への興味・意欲」「④レポート執筆、発表・報告の技能」「⑤グループでの議論・合意形成の技能」が出され、さらにタイプDには、サンプル全体・男性・女性・生涯学習専攻・生涯スポーツ専攻の「⑨学科教員・上級生への親しみ」、サンプル全体と生涯学習専攻の「⑪セミナー受講の満足度」、男性の「⑦学科の特徴・理念、目標の理解」、女性の「③講義科目の内容への興味・意欲」が析出されている。

このことから、生涯学習および生涯スポーツにかかわる基礎的な知識を理解することの成果が徐々に上がってきていること、また特定の属性（男性および生涯学習専攻）にとっては、友人関係等の構築の場として機能しつつあることなどが示唆される。しかし同時に、本学科教員や上級学生への親しみを得る機会としての成果がそれほど上がっていないことも明らかとなっている。セミナーは、本学科に所属する全教員、さらには上級学生も含む連携・協働のもとで運営する科目であるが、現実的には運営者に偏りが生じていることの影響によるものと推測される。さらに、本学科の特徴・理念などを理解すること、将来の進路や目標についての考えることなどについても、成果が上がっていない。18～19歳の青少年にとっては、学校教育と異なり、生涯学習支援・社会教育の経験が殆ど無いこともあって、生涯学習支援者養成課程はそもそもイメージしにくい分野であると考えられ、セミナー内で具体の現場や実践のことは少しずつ理解しつつあるとしても、カリキュラムの全体像や理念の理解まで至っていないことも同時に見出されている。加えて、グループでの議論や合意形成といったグループワークについては、生涯学習専攻は成果が上がりつつあるのに対し、生涯スポーツ専攻では下がりつつある。このような専攻によって年度変化の傾向に違いが見られる項目の特徴を掴むことも、初年度教育における改善の手がかりの1つになると思われる。

(2) 活動への評価について

活動への評価については、タイプAに該当する項目は見られない。タイプBとしては、サンプル全体・女性・生涯学習専攻の「②上級生からのメッセージ」、サンプル全体・男性・女性・生涯スポーツ専攻の「④スポーツ経営の現場」、男性と生涯学習専攻の「⑩生涯学習事業の体験報告会」の各項目が析出されている。

一方、タイプCには、生涯スポーツ専攻の「⑦生涯学習施設の現状」が挙げられ、またタイプDでは、全体・女性・生涯スポーツ専攻の「⑧まちづくりの課題」、女性の「⑦生涯学習施設の現状」が挙げられる。

個々の活動については、年度によって講師・内容等が異なることから即断はできないが、上級学生が参画する活動や生涯スポーツ分野の実践にかかわる講義は年々評価

が上がってきている。初年次学生にとっての上級学生は4年間の学修に向けた貴重なアドバイザーであり、恐らく多くの初年次学生は上級学生との日常的な交流があると推測できるが、上述の結果は、授業としてそのような交流の場を改めて持つことの意義を示唆している。一方、生涯学習分野の実践にかかわる講義については評価が下降気味で、生涯スポーツ分野との相対的な違いが見られる。これは講師・内容等の改善によって解決され得る課題なのか、あるいは分野間の本質的な差異なのかまでは現時点では判断できないことから、今後、講師・内容等の改善を繰り返しながら、追跡的な評価分析を行う必要があるだろう。

5. 今後の課題と展望

現在、本学科のカリキュラム改革は完成年度を迎え、セミナーも4年目の実践が進捗している。新カリキュラムのポイントは、①初年次教育の充実のための「生涯学習セミナー」(2単位)の新設、②体験型のカリキュラムの充実のための「社会教育実習」(2単位)の必修化⁹⁾、③学科の“出口管理”を確立するための「生涯学習特別研究」(6単位)の必修化、の3点に集約されるが¹⁰⁾、とりわけセミナーは4年間の学科カリキュラムの「起点」として重要な位置を占める。

前回の報告においては、初年度の実践をふりかえりつつ、今後の課題として下記の3点を提示した¹¹⁾。

- ① 継続的な効果検証ときめ細かな授業改善
- ② カリキュラム・マップへの位置づけの明確化
- ③ ファカルティ・ディベロップメント (FD) への活用促進

4年の実践を終えようとしている現在、これら各課題はますます重要性をもつものと言える。とりわけ、本稿の分析結果が示すように、授業の成果を左右する諸条件(授業内容・方法のみならず、学習者、指導者、学習環境など)は常に変動するものであり、PDCAの短期的サイクルとも呼べる①については、今後も継続的なデータ収集が続けられるべきだろう。また、中長期的サイクルの起点をもたらず②についても、大学のカリキュラム改革の進展に応じた修正・再構築が図られなければならない。

以下、上記①、②の各視点について、今後の展望も含めて敷衍し、本稿のまとめに代えたい。

① 継続的な効果検証ときめ細かな授業改善

既述のとおり、3カ年にわたる学生の評価データをもとに、セミナーの効果の検証を試みたところ、初年度よりもスコアを下げる受講成果や活動項目が散見されるなど、全体的に授業効果の高まりを確認することはできなかった。とりわけ、学科の理念・目標を理解したり、将来の進路について考えたりする機会としての役割については、あまり成果が上がっておらず、内容上のさらなる工夫が求められる。また、学科教員や上級生との交流を促し、学科としての一体感の醸成という部分の成果についても、相対的に低い評価にとどまっている。

その背景として、平成 26 年度からの授業体制の変更¹²⁾や年度によって授業日程が一定しないことの影響¹³⁾などが考えられる。また、授業担当者に“慣れ”が生じてしまい、やや緊張感を欠く授業運営になってしまった可能性、年度を重ねるうちに上級生からの情報（口コミ等）がセミナーに関するややマイナスのイメージを形成した可能性なども否定できない。

これらの仮説の中には検証が難しいものも含まれているが、マイナスの要因を可能な限り特定・排除しつつ、当該年度の諸条件の中での最適な授業デザインを見出し、教員・学生双方が常に新鮮な気持ちで授業に取り組めるような環境の維持に努めるべきだろう。

② カリキュラム・マップへの位置づけの明確化

セミナーは初年次教育のひとつとして位置づけられてはいるが、他の講義・演習・実習科目といかなる関連性をもたせるかについては必ずしも明確にされているわけではない。セミナーによって培われる資質・能力が多岐にわたることもあり、他の学科内外の多くの授業科目と内容上の関連性・類似性が存在する。セミナーを起点に科目間の調整を図ることは、整合性のあるカリキュラム体系を構築する上で不可欠の手続きと言える。

その際の視点としては、(a) 初年次教育のもうひとつの柱である「人間力セミナー」との関連、(b) 生涯学習・生涯スポーツに関する知識・理解の獲得における「生涯学習概論Ⅰ・Ⅱ」「生涯スポーツ概論Ⅰ・Ⅱ」等との関連、(c) 体験的活動における「社会教育実習Ⅰ・Ⅱ」「野外活動実習」「ボランティア実習」等との関連、(d) レポートや計画書・報告書の作成、発表等の活動における「生涯学習演習Ⅰ・Ⅱ」「生涯学習特別研究」等との関連、(e) 進路を展望する活動におけるキャリア系の科目（「キャリア開発基礎」等）との関連、などをあげることができる。

全学的なカリキュラム改革において、教養教育の再編（「教養セミナー」の新設を含む）も予定されており、とりわけスキル系、キャリア系科目の編成如何によっては、セミナーの意義を再定義する必要性が生じることも想定しておかなければならない。その場合においては、セミナーの廃止や目標の縮小なども必要となろう。

以上、セミナーの課題と展望について、2つの視点から述べた。

平成 25 年度、「生涯学習」（生涯教育、社会教育）に関する学科・専攻・コース等をもつ大学は 25 大学（国立 16、私立 9）に限られ¹⁴⁾、現在も募集停止等の傾向が続いている。本稿の序論で述べたように、生涯学習を冠する学科の希少性が高まる中で、社会的な期待が集中的に本学に集まることも予想される。そのような状況において、セミナー（ならびに社会教育実習Ⅰ・Ⅱ）はカリキュラム改革の先進事例として、類似の課程をもつ他大学から注目され始めている¹⁵⁾。

教育学部の将来構想が検討されている中で、学科も大きな岐路に立たされている。仮に、生涯学習・生涯スポーツの指導者養成を継続するのであれば、教員養成系学部

におけるゼロ免課程の「生き残りモデル」を打ち立てるほどの決意をもって臨まなければならないことは言うまでもない。学科カリキュラムに明確に位置づけられたセミナーを起点として、社会に役立つ人材を養成するためのきめ細かな授業改善を続けること——前回の報告と同様、本稿の結論もこのように言うことができるだろう。

注

- 1) 文部科学大臣通知「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」(2015年6月8日)。
- 2) 同上。
- 3) 文部科学省「各国立大学の第3期中期目標・中期計画の素案(平成27年6月)」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1363027.htm (参照日:2015年11月4日)などを参照。
- 4) 猿田真嗣「体験・交流・内省を軸とした初年度教育科目の開発と実践—平成24年度「生涯学習セミナー」の実施報告—」(『常葉大学教育学部紀要』第34号, pp.163-180, 2014年)。なお、セミナーの概要については、同pp.164-166を参照。
- 5) ここでいう四分位法とは、各項目の得点を高低の順に並べ、それらを四分位点による分割を行い、第3四分位点より得点の高い項目群を上位群、第1四分位点より得点の低い項目群を下位群に分類する方法である。一般に、任意の定数 p ($0 < p < 1$) に対して、 $100p\%$ 分位点とは、測定値を大きい順に並べたとき、 a より小さい測定値の比率が $100p\%$ 以下で、かつ a より大きい測定値の比率が $100(1 - p)\%$ 以下のとき、 $100p\%$ 分位点となるような値 a のことを指す。このうち、 25% 分位点を第1分位点、 50% 分位点を第2分位点(メディアン)、 75% 分位点を第3分位点と呼ぶ(佐和隆光『初等統計解析』(新曜社, 1974年) pp.42-43を参照)。
- 6) H24調査における質問紙については、猿田前掲論文 p.178の資料3を参照。H25及びH26調査にあっても、継続調査としての性格上この質問紙と同様式であるが、項目およびワーディングについて若干の修正等を加えて実施した。
- 7) 但し、H24では①と②の項目が未分化であったことから、ともに「生涯学習・スポーツの知識・理解」のデータを流用している(以下、同様)。
- 8) 但し、H24では、④⑥⑩の3項目について調査を行っていないため、データ無しとなっている。また、⑧については「ボランティア活動の意義」のデータを流用している(以下、同様)。
- 9) 正確には、旧カリキュラムの「社会教育実習」を「社会教育実習Ⅰ」に名称変更した上で必修化し、実習の発展・継続を目的とする「社会教育実習Ⅱ」を選択履修できるようにしたものである。
- 10) 猿田前掲論文、p.164。
- 11) 同上、pp.174-175。
- 12) たとえば、平成26年度、教務上の措置によりセミナーの担当教員が学科教員全員(15～16名)から6名の教員へと減員されている。担当者以外の学科教員にも、

- 1 回目のセミナーへの出席を要請しているが、相対的にかかわりが薄くなっていることは否定できない。
- 13) セミナーの時間割は水曜日 4 時限に固定されているが、人間力セミナー（通年 15 回）や月例の教授会等が実施されない週に限られる。そのため、授業期間中に 15 回の授業を確保することが難しく、長期休業中の自主活動に加え、ガイダンス期間や補講・試験期間などにも一部実施し、15 回に相当する学修量を確保している。
- 14) 荻原幸子・野口武悟「〈研究ノート〉 大学における『生涯学習』教育の実践：専修大学文学部における今後のカリキュラム改革に向けて」(『専修大学社会科学年報』第 49 号, pp.261-269, 2015 年) p.261。
- 15) 同上、pp.266-268。

